

41853

教科書文庫

4
815
41-1909
20000
35409

Kodak Gray Scale



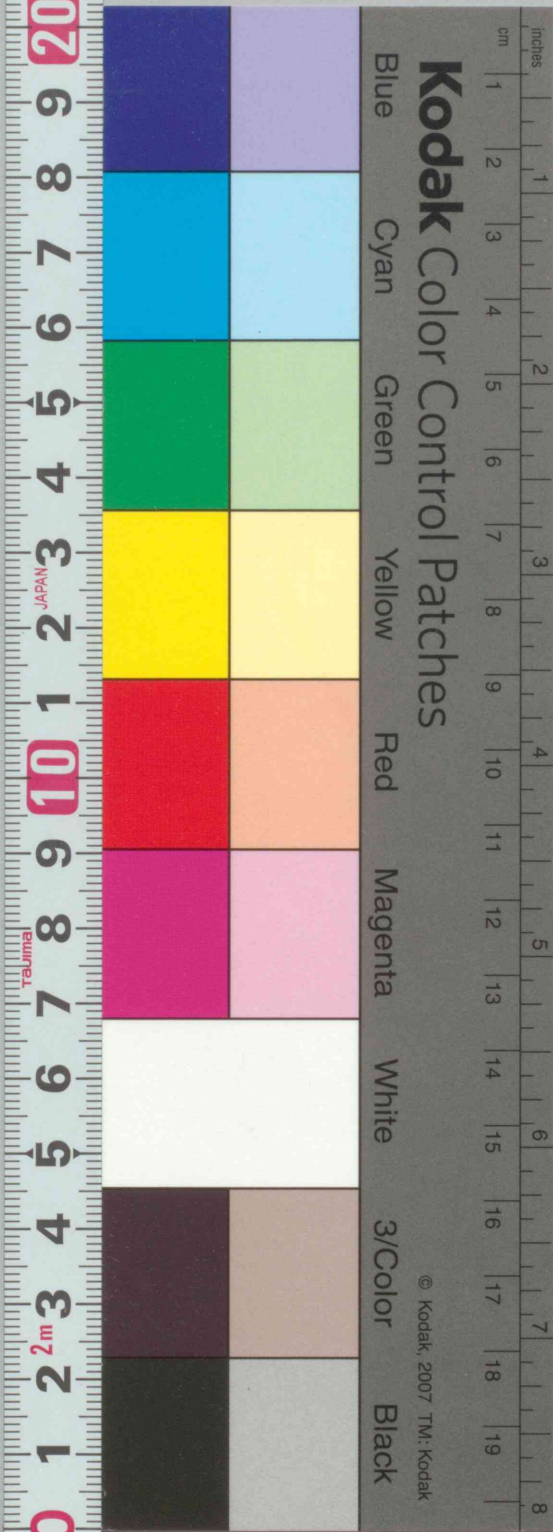
© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



375.9  
Ka9  
資料室

心修





3759  
K29

文部省檢定濟

明治三十五年十二月十七日 中華學校國語科用

文學博士大槻文彦校  
開成館編輯所編纂

中學校一年級用

# 修正國語綴字法教科書



開成館藏版

## 例言

本書は中等教育程度の諸學校の初年級の教科に充てむが爲に、わが國の文字、音韻の大要を説きたるものなり。

本書を編纂するに當りて、殊に意を用ゐたる廉々は左の如し。

- 一、初年級の生徒の知識の程度を考へて、叙述を最平易に、且、最簡明ならしめたり。
- 二、一新事項を教へむとするには、必ず、初に適切なる例を示してこれを豫備とし、次に説明、法則を與へて教授に入り、終に演習例題を具へて練習に便にしたり。而して、この演習例題は生徒既得の知識の應用を試るに十分ならしめむが爲に、多趣多様の材料を採りて、つとめて豊富ならしめたり。
- 三、假名遣を教ふるは、從來刊行の書に散見せるが如き、同じ假



名遣の語を漫然排列し、或は歌句に詠みなどする方法にては、到底全功を收めがたし。本書は、同じ假名遣の語のうちにて、語原を同じうし、或は趣を同じうするものは、その類に従ひて、分ちてこれを挙げ、すべて、これらを五十音圖の順につらねたり。而して、これらの考據は主として「言海」に従ひたり。

四、漢字に關することどもは、その必要なる限を説きて、字音假名遣は主に通則によりて類推する法を用ゐたり。されども、教授する者の便宜取捨にまかせむとて、特にこの一章を卷末に置けり、こゝに演習例題を缺きたるも、またこの意にいづ。

明治三十五年七月

正修國語綴字法教科書目次

緒論	.....	一頁
第一章 假名	.....	一
第一 片假名	.....	二
第二 平假名	.....	三
第三 濁音 半濁音	.....	四
第四 拗音	.....	六
第五 鼻聲	.....	七
第六 促聲	.....	八
第七 引音符	.....	九
第八 踊字	.....	九
第九 演習例題	.....	十
第二章 音韻の變轉	.....	十一



第一	連濁……………	十一
第二	音通……………	十二
第三	略音……………	十三
第四	約音 延音……………	十四
第五	音便……………	十五
第六	轉呼音……………	十七
	演習例題……………	十八
第三章	假名遣……………	二十一
第一	「い」「ゐ」「ひ」……………	二十二
	演習例題……………	二十四
第二	「う」「ふ」……………	二十六
	演習例題……………	二十八
第三	「え」「へ」「ゑ」……………	二十九
	演習例題……………	三十一

第四	「お」「ほ」「を」……………	三十三
	演習例題……………	三十六
第五	「は」「わ」……………	三十七
	演習例題……………	三十九
第六	「じ」「ぢ」……………	四十
	演習例題……………	四十三
第七	「ず」「づ」……………	四十四
	演習例題……………	四十六
第八	阿段の轉呼音……………	四十八
第九	衣段の轉呼音……………	四十九
	演習例題……………	五十
第四章	字音假名遣……………	五十三



正修 國語綴字法教科書目次終



正修 國語綴字法教科書

緒論

言葉  
人の聲の意味あるものを言葉といふ。人は言葉によりて、その思をあらはす。

文字  
言葉を物に書きつくる標を文字といふ。  
假名  
わが國にて用ゐる文字に假名と漢字との二類あり。假名はわが國の文字にして、わが國語はこれをのみ用ゐても、しるすことを得。されど、古よりの習にて、支那國の文字なる漢字をもまじへ用ゐるなり。

片假名  
假名  
平

第一章 假名

假名に二種あり、片假名と平假名と、これなり。



五十音圖

第一. 片假名.

片假名は、通例、次の五十音圖といふものにならべらる。

阿段 伊段 宇段 衣段 於段

阿行	ア	イ	ウ	エ	オ
加行	カ	キ	ク	ケ	コ
佐行	サ	シ	ス	セ	ソ
多行	タ	チ	ツ	テ	ト
奈行	ナ	ニ	ヌ	ネ	ノ
波行	ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ
末行	マ	ミ	ム	メ	モ
也行	ヤ	イ	ユ	エ	ヨ
良行	ラ	リ	ル	レ	ロ
和行	ワ	ヰ	ヱ	ヰ	ヱ

行 段

母韻 子音

右の五十音圖につきて、縦の五音を行といひ、横の十音を段といふ。各行各段とも、いづれも、そのはじめにある音によりて、阿行、加行、佐行、多行など、または、阿段、伊段、宇段などといふ。阿行の五音は、口を開きて聲を發すれば、單純に出づ。されど、加行以下九行の音は、各行に別に一種の聲ありて、これと阿行の五音と、相熟して、始めて、その行の五音と成る。この故に、阿行の五音を**母韻**といひ、餘の九行の四十五音を**子音**といふ。

第二. 平假名.

五十音圖の中にて、也行の「イ、エ」と、和行の「ウ」とは、阿行の「イ、ウ、エ」と、各二音相似通へば、古より同じき假名を用ゐたり。されば、片假名の字數は實は四十七なり。次のいろは歌はこの四十七字を平假名にて記したるもの

いろは歌



なり。

い	ろ	は	に	ほ	へ	と
ち	り	ぬ	る	を		
わ	か	よ	た	れ	そ	
つ	ね	の	ら	む	や	ま
う	ぬ	こ	お	く		
け	ふ	え	て	め		
あ	さ	き	ゆ	み		
ゑ	ひ	も	せ	す		
ゑ	ひ	も	せ	す		

別體の字形、尙多し。

第三、濁音、半濁音。

濁音 半濁音

五十音の外に、濁音と半濁音とあり。濁音の数は二十ありて、これを表するには、五十音圖の加行

佐行、多行、波行の、四行二十音の假名の右肩に、二點を加へて用ゐる。

ガ	ギ	グ	ゲ	ゴ
ザ	ジ	ズ	ゼ	ゾ
ダ	ヂ	ヅ	デ	ド
バ	ビ	ブ	ベ	ボ

平假名にて書くときも、これに倣ふ。

半濁音の数は五ありて、これを表するには、五十音圖の波行五音の假名の右肩に、一圓點を加へて用ゐる。

パ	ピ	プ	ペ	ポ
---	---	---	---	---

平假名にても、これに倣ふ。

濁音、半濁音を表する標點なき假名をば清音假名といひて、濁音、半濁音の假名に對して、これと別つ。

清音假名



第四 拗音

五十音濁音半濁音の外に、尙、拗音といふものあり。「去年、魚類、汽車、麝香」といふ「去、魚、車、麝」の音の如し。これにも清濁、半濁あれども、いづれも、また、表するに別の假名なく、也行、和行の假名を他の假名に連ねて、綴り合せて用ゐる。尋常、用ゐらるゝ拗音は次の如し。

キ	キ	キ	キ	キ	キ	キ
キヤ	キユ	キ	キ	キ	キ	キ
ギ	ギ	ギ	ギ	ギ	ギ	ギ
ギヤ	ギユ	ギ	ギ	ギ	ギ	ギ
シ	シ	シ	シ	シ	シ	シ
シヤ	シユ	シ	シ	シ	シ	シ
チ	チ	チ	チ	チ	チ	チ
チヤ	チユ	チ	チ	チ	チ	チ
ニ	ニ	ニ	ニ	ニ	ニ	ニ
ニヤ	ニユ	ニ	ニ	ニ	ニ	ニ

直音  
半母韻

平假名にても、これに倣ふ。この「キヤ、キユ、キ、ギヤ、ギユ、ギ」などの拗音に對しては、「カ、ク、ユ、ガ、グ、ゴ」などを直音といひて、これと別つ。也行、和行の音は、かく他の一種の聲と相熟して、一音と成るが故に、半母韻の名あり。

第五 鼻聲



鼻聲

例 わらんへ(童) 進んで。 ゆゑん(所以)。  
 しんぶん(新聞) くわんり(官吏)。  
 右に示せる語を綴れる假名の中にて、「ん」は上の假名の音を發して、口を閉ぢ、氣息を鼻に壓し出すが如くして、發する聲なれば、これを鼻聲といふ。鼻聲は常に他の音の下に付き、て出で、その音と相合して、一音と成る。この片假名には、「ん」を用ゐる。

第六. 促聲

例 やつ(奴) ほつす(欲) もつとも(最)。  
 しつげい(失敬) ざつし(雜誌) せつつ(攝津)。  
 くわつぱつ(活潑)。  
 右の諸語を綴れる假名の中にて、稍右方にかたよせて、小さく記せる「つ」は、氣息の、口内につまる聲なれば、これを促聲と名

促聲

づく。この聲も單獨には出でず。これを表する假名別に無ければ、常に「つ」を借りて用ゐる。片假名にては、「ッ」を用ゐること、「ユッ」「高丞」「マッ」「ナ」(鱗寸)などの如し。

第七. 引音符

例 ビール(麥酒) ボート(短艇)。  
 右の二語を綴れる假名に雜へて用ゐたる、「丨」は、上にある假名の音の韻を引くことを示す符號にて、これを引音符と名づく。引音符は、片假名、平假名ともに、通じて「丨」を用ゐる。

第八. 踊字

例 チチ(父) はは(母) イロイロ(色色)。  
 さまざま(様様) オソルオソル(恐恐)。  
 ところどころ(所所) ツメカケツメカケ(詰掛詰掛)。  
 右の諸語の如く、同じ假名を、一字又は二字以上重ねて記す

引音符



踊字

ときに、下の假名に代へて、

チ、ハ、イロく、さまく、

オソルく、ところく、ツメカケく

の如く、一字には、片假名に、ゝを、平假名に、ゝを用ゐ、二字以上には、片假名平假名ともに、くを用ゐる。この符號を踊字といひ、その濁音を表するには、假名の如く、右傍に二點を加ふ。

演習例題

- 一、平假名にて、五十音圖を記せ。
- 二、片假名にて、いろは歌を記せ。
- 三、平假名にて、濁音、半濁音を記せ。
- 四、平假名にて、次の語の音を記せ。  
勅語、食物、御者、百尺、書畫、策略、珠玉、旅宿、茶屋。

音韻の變轉

- 五、平假名にて、次の語の音を記せ。  
漢文、玄關、金魚、山脈、願書、蒟蒻、春花、電信局
- 六、片假名と平假名とにて、次の語の讀方を記せ。  
専ら、全し、四日、服部、鼈、密室、出席、關課。
- 七、次の語を平假名にて記せ。  
耳、桃、屢、次次、販販し。
- 八、引音符を用ゐるべき語、五を挙げよ。

第二章 音韻の變轉

發音の便に隨ひて、原音を他音に變じ、或は別に一音を加へ、或は全くはぶくことあり、これを音韻の變轉といふ。音韻の變轉に七様あり。

第一、連濁

例、の(野)さく(菊)の(ぎ)く。 さ(ま)様(の)さ(ま)様(の)さ(ま)



連濁

右の例の如く、二音以上を連呼するとき、發音の便に隨ひて、清音なる原音を濁音、又は半濁音に變ずることあり、これを連濁といふ。

連濁は用例あるものに限られ、これを假名にて書くには、濁音、半濁音を表する標點を加ふ。

第二 音通

- 例一。
- ふね(舟)はた(端) 〓 〓 ふなばた。  
 あめ(雨)よ(夜) 〓 〓 あまよ。  
 き(木)たち(立) 〓 〓 こたち。

例二。

- はつか(僅) 〓 〓 わづか。  
 けぶり(烟) 〓 〓 けむり。  
 はる(春)あめ(雨) 〓 〓 はるさめ。

音通  
縦通、横通

右の二例の如く、發音の便に隨ひて、ある音を他の子音に變ずるを音通といふ。例の一にある如く、同行の音に變ずるを縦通といひ、例の二にある如く、同段の音に變ずるを横通といふ。

音通には一定の規なく、只慣例あるものに限りにて、これを用ゐ、また、これを假名にて書くには、その變じたる音による。

第三 略音

- 例。
- かは(河)うち(内) 〓 〓 かけち。  
 みづ(水)ぎ(際)は 〓 〓 みぎは(江)。  
 まがり(曲)たま(玉) 〓 〓 まがたま。







音便

右の二例の如く、二音以上を連呼するとき、發音の便に隨ひて、原音を母韻に變じ、或は別に一母韻を加ふることあり、これを音便といふ。この音便には、「イ、ウ」の二母韻を限りて用ゐる。

音便には、尙、次の二種あり。

例三。 讀みて 讀んで。 學びて 學んで。

みな皆 みんな。

この例の如く、原音を鼻聲に呼びかへ、或は別に鼻聲を加ふることあり。これも一つの音便なり。

例四。 向ひて 向つて。 賣りて 賣つて。  
うたへ 訴 訴う 訴うたへ。

この例の如く、原音を促聲に呼びかへ、或は別に促聲を加ふることあり。これも、また音便なり。すべて、音便は一語の首に發せず、これを假名にて書くには、原音によらずして、變じたる音聲に従ふ。

第六。 轉呼音。

例一。 かは 川 川かワ。 あたひ 價 價あたひ。  
ゆふべ 夕 夕ゆウべ。 いへ 家 家いエ。  
おほさか 天 天おオさか。

この例の如く、波行の五音は、「ひ、ふ、へ、ほ」は他の音の後にあるとき、「ワ、イ、ウ、エ、オ」の如くに、轉じて呼ぶ。

例二。 かうべ 首 首かうべ。 くらふ 捕 捕くらふ。 と口  
ふ。  
てうづ 手水 手水てうづ。 ゑふ 醉 醉ゑふ。 ヨ



轉呼音

この例の如く、阿段の音と、衣段の音とは、下に「う」、又は「う」の如く轉じ呼ぶ「ふ」を承くれば、於段の音の如くに轉じて呼び、或は「お」の母韻にて成る拗音の如くに轉じて呼ぶ。さて、右の二例の如く、假名を、その原音のまゝに呼ばずして、發音の便に隨ひて、他の音に轉じて呼ぶことを轉呼音といふ。

轉呼音を書くには、すべて、原音の假名を用ゐる。その假名のつかひ方は第三章に説くべし。

演習例題

- 一、 次の語に假名を附けよ。  
竹垣、朝霧、國國、眉毛、餅米、子猿、離島、粉炭、火攻。

ふ。

二、

紅染、戸棚、鼻血、三日月、四手網、高殿、櫻花、世捨人、釣舟、薄縁、内堀。

次の語に假名を附けよ。

三、

火影、荒波、金物、白玉、舟子、竹叢、爪先、手枕、村雨、酒樽、盃、風車、黃金、雨傘、手綱、目蓋、舟人。

次の語に假名をつけ、これに就きて、連濁と音通とを説明せよ。

四、

笠置、山縣、鳴海、炭櫃、鏡、狩野、蓮、晦。

次の語に假名をつけ、これに就きて、連濁と略音とを説明せよ。

五、

内海、常磐、豊臣、錦織、捧ぐ、擡ぐ、明なり。

次の語に假名をつけ、これに就きて、約音を説明せよ。

六、

かみべ(神戶)、つきたち(朔)、は、き(舞)、ひむか(日向)、てみづ(手水)、まをす(申)、さぶらふ(俵)、かりびと(獵人)、かみかさ(髮掻)、樂しき遊、咲きたる花、乞ひて、久しく待つ。

次の語を、音便にて呼びかへよ。

七、

次の語を音便にて呼びかへよ。



かみた(神田)、とみた(宮田)、かみさし(髪挿)、みやすみどころ(御處所)、おもひはかる(慮)、めとり(雌鳥)、もはら(専)、またく(全)、よか(四旦)、討ちて、勝ちて、取りて。

八

次の語に就きて、音便と、略音と、延音とを説明せよ。

きさい(皇居)、をのへ(尾上)、ついたて(衝立)、こうぢ(小路)、あきんど(商人)、やうく(漸)、されば、願はく、思へらく。

九

次の語を、普通にていかによぶか。

はしる(走る)、みそか(密)、さぶらひ(侍)、かうぶる(被)。

十

次の文の假名のあやまりを正せ。

赤ひ花の美しゆ咲ひたる樹を買ふて来よ。

今出で行いたる汽車はしんはし(新橋)、こうべ(神戶)間の急行列車なり。

さひつころ、かの地を去て、海岸に沿ふて旅行し、本月(ヤ)よおかえ旦、この地に着き(ま)もおし候。

第三章 假名遣

例一。

あは(粟)、あわ(泡)、かひ(貝)、かい(櫃)、すふ(吸)、すう(据)、はへ(鱧)、はえ(鮓)、いほり(庵)、はおり(羽織)、こたふ(答)、いとふ(厭)。

例二。

おる(居)、いる(射)、ゑ(繪)、え(江)、をば(伯叔母)、おば(祖母)、はら(耻)、はじ(槿)、くづ(層)、くず(葛)。

假名遣

右の例の一なる「は」「ひ」「ふ」「へ」「ほ」「た」「ふ」などは、轉呼音にて、「わ」「い」「う」「え」「お」と「ふ」など、相紛れ易く、例の二なる「ゐ」「ゑ」「を」「ぢ」「づ」などは、その正しき音、今は殆どすたれて、「い」「え」「お」「じ」「ず」などと、相紛れ易し。かゝる紛れ易き音を辨へ知りて、その正しき假名を書き分くる法を假名遣といふ。



第一、「い」「あ」「ひ」

- 例一。 い(射) ぬ(井) いたち(鮪) ぬもり(蝶鱈)
- 例二。 ついたて(衝立) まねる(參) たひら(平)
- 例三。 かい(櫃) あぬ(藍) かひ(貝)

右の諸例の如く、一音の語又は一語の上において「い」と「あ」と相紛れ、一語の中と下とにありては、「い」「あ」「ひ」共に相紛る。今、次々に、「い」と書くべき語と、「あ」と書くべき語とを擧ぐべし。

「い」

○一語の中と下とに「い」と書くべき語。

- ▲かい(櫃)
- ▲おい(老) くい(悔) むくい(報)

(すべてその語尾を也行いゆに轉ずる語)

右の外すべて、音便にて「い」とかくべき語(第二章第五例

「あ」

の「い」

○「あ」と書くべき語。

- ▲ぬ(井) ぬもり(蝶鱈)
- ▲ぬ(堰) ぬせき(堰)
- ▲ぬ(猪)(豕)(亥) ぬのこ(豕) ぬのしこ(猪)
- ▲ぬ(居) ぬる(居) ぬざり(寔) ぬしき(匠) ぬ
- なか(田舎) はらぬせ(報怨) うなぬ(鬢髮) かた
- ぬ(食) くらぬ(位) とのぬ(宿直) なぬ(地震)
- まとぬ(圓居) もとぬ(基)
- ▲ぬ(蘭) あぢさぬ(紫陽花) おほぬ(莖) くわぬ(慈姑)
- ふとぬ(莖)
- ▲ぬや(禮) ぬやまふ(敬)



▲ぬる(率) ひきぬる(率) もちぬる(用)

▲まぬる(参)

▲あぬ(藍) くれなぬ(紅)

以上に擧げたる語と、これらの語にて成れる熟語との外は、大抵一語の上にては、「い」の假名を用ゐ、中と下とにては、「ひ」の假名を用ゐるべし。

演習例題

一、次の語に假名を附けよ

稻 命 錨 暇 急ぐ 戒む 至る 及 朔 序

二、次の語に假名を附けよ

杭 灰 鯛 憂 病 魂 飾 鹽 水雞 路

三、次の文の中にて、傍線を施したる語に假名を附けよ

善き行には善き報あり。  
性相近く、習相遠し。

飯田家の飼犬は色白し。

慈姑と芋との假名遣は如何。

鳥居の頂に鶯鳴き居たり。

小き鶯五つばかり、蓮池に泳ぐ。

蠶を養ふことは、國を富す基なり。

生絲の市は、朔より六日までの間に開かれむ。

かの甍の乞食は、乾の方へ迷行きたり。

宿直の侍共、圍居して、軍物語をなせり。

この雇人は、近頃田舎より参りたる者として、物の言様、起居、振舞、未だ禮になれず。

四、次の文の假名遣の誤を正せ。

神武天皇は中州をたいらげたまいき。

信長兵を率ひて、家康を救い、大ひに三形原にたゝかゝりて敗れ



たり。  
 かる細工を買いて來よと、手紙に書ひてあり。  
 わがゐもうとの髪ゆいは稍老ひたる女なるが、濃ひくれない  
 の襷を用ひてをり。  
 このくらひ美しひ、こうがゐは、またとあらざるべしと、かれは  
 い、けり。

第二、「う」「ふ」

- 例一　　ゆうへ(昨夜)　　ゆふへ(夕)  
 例二　　すう(掘)　　すふ(吸)

右の例の如く、「う」と「ふ」とは、一語の中、又、下にありては相紛れ、  
 一音の語、又、一語の上によりては、紛るゝことなし。

○一語の中以下に、「う」と書くべき語。

- ▲うう(種)　　うう(飢)　　すう(掘)

「う」

(すべて、その語尾を、和行「う」ゑに轉ずる語)

右の外、すべて、音便にて、「う」と書くべき語(第二章、第五、例  
 の二)。

これらの語と、その熟語との外は、大抵「ふ」の假名を遣ふべし。  
 但し、その語尾を、也行の「い」「ゆ」又は「ゆ」「え」に轉ずる語の「ゆ」  
 に終るときは、「う」と「ふ」と、この「ゆ」と相紛るゝことあり。例  
 へば、

- しふ(強)　　うう(飢)　　くゆ(悔)  
 をしふ(教)　　おぼゆ(覺)

などの如し、されば、次に、語尾を「ゆ」と書くべき語を示さむ。

- ▲おゆ(老)　　くゆ(悔)　　むくゆ(報)

(すべて、その語尾を、也行「い」「ゆ」に轉ずる語)

- ▲いゆ(癒)　　おびゆ　　おぼゆ(覺)　　きこゆ(聞)

「ゆ」



きゆ <small>(消)</small>	こゆ <small>(肥)</small>	こゆ <small>(越)</small>	さかゆ <small>(榮)</small>
さゆ <small>(涯)</small>	しなゆ <small>(萎)</small>	そびゆ <small>(聳)</small>	たゆ <small>(絶)</small>
つひゆ <small>(瀆)</small>	なゆ <small>(痿)</small>	はゆ <small>(生)</small>	はゆ <small>(映)</small>
ひゆ <small>(冷)</small>	ふゆ <small>(殖)</small>	ほゆ <small>(吼)</small>	まみゆ <small>(見)</small>
みゆ <small>(見)</small>	もゆ <small>(燃)</small>	もゆ <small>(萌)</small>	

(すべて、その語尾を也行ゆゑに轉する語。)

演習例題

- 次の諸文の假名遣を誤れるは正し、傍線を施したる語には假名を附けよ。
- 一 言ふは易ふして行うは難し。
  - 二 互に飲酒を強ゆる習は、早ふ改めたきことなり。
  - 三 飢ゆる犬ども争ふて走り來れり。

「え」

- 四 節面白ふ謠を歌ふて錢を乞う人あり。
- 五 教師の講義を筆記帳に控ゆるのみにては、覺うることに難し。
- 六 わが師は人を教ゆることに深切なれば、就ひて學ぶ者いと多し。
- 七 われは今宵藍にて石井と染出だせる手拭をかふぶりたる田舎人に遇ひたり、君の噂し給うは、或はその人のことならむ。

第三、「え」「ゑ」「へ」

- 例一 え(柄) ゑ(餌) え(ひめ) 愛(媛) ゑ(が) ほ(笑顏)
- 例二 ひえ(どり) 鶇 かへ(る) 蛙 ゆゑ(ん) 所以
- 例三 ふえ(笛) いへ(家) つゑ(杖)

右の諸例の如く、一音の語、又は、一語の上において「え」と「ゑ」と相紛れ、一語の中、下にありては、「え」「へ」「ゑ」、共に相紛る。

○一語の中と下とにて、「え」と書くべき語。



- ▲さゝえ(榮螺)      ふえ(笛)
- ▲ぬえ(麴)      ▲はえ(鮑)
- ▲ひえ(種)      ▲ひえどり(鶺鴒)

右の外、すべて、その語尾を、也行「ゆゑ」に轉ずる語本章、第二を參見すへし。

「あ」と書くべき語

- ▲あ(餌)      あづく(嘔吐)      あた(穢多)
- ▲あそ(鱧)
- ▲あふ(醉)
- ▲あむ(笑)      あくぼ(歴)      こゑ(聲)
- ▲ある(彫)      あぐる(列)      あぐし(脛)
- ▲すあ(末)      こずあ(梢)

- ▲いしずあ(礎)      つくあ(机)      つあ(枕)      すあもの(陶器)
- ▲ゆあ(故)
- ▲うあ(飢)      うあ(植)      すあ(据)

(すべて、その語尾を和行「うゑ」に轉ずる語)

以上、「えゑ」と書くべき語と、その熟語との外は、大抵、一語の上にては、「え」の假名を用ゐ、中と下とにては、「へ」の假名を用ゐるべし。但し、なほ、漢字の吳音にて、「ゑ」の假名を書くべき語あり、その常に用ゐらるゝは、次の如し。

- ▲ゑ(繪)      ともゑ(鞆繪)
- ▲ゑぼし(烏帽子)      ▲ゑんじゆ(槐)

演習例題



次の諸文の假名遣の誤れるをば正し、傍線を施したるには假名を附けよ。

- 一、机の上にあるは何の繪なるか。
- 二、われは教えられたる通、計算したれど、終に正しき答を求め得ざりき。
- 三、かの家の礎、いよく固くなりたれば、そのますく富み榮へむは疑なし。
- 四、無用の費をはぶきて、貯へたる金にて、飢に苦む者を救え。
- 五、火は四方え燃へひろがりて、急に消えむ様見えず。
- 六、堪えと絶へとの假名遣の違をこゝろへおくべし。
- 七、苗を植ゆるにも、よき時を擇ぶべきなり。
- 八、鳥居の前なる榎の梢に、一羽の鶉、聲低う鳴けり。
- 九、濃き紅の楓の小枝を携ゑて、歸り來る人多し。
- 十、萌黄色の綿入着たる老ひたる人は、箒を杖につひて、槐の木陰に憩るべし。

「を」

第四、「お」、「ほ」、「を」

- 例一、お(御) を(尾) おる(織) を(る) 扱
- 例二、に(ほ)ひ(匂) か(を)り(香)
- 例三、か(ほ)顔(顔) さ(を)筭(筭)

右の諸例の如く、一音の語、又は、一語の上によりては、「お」と「を」と相紛れ、一語の中、下にありては、「ほ」と「を」と相紛る、而して、國語にては、一語の中、下に「お」と書くべき語はなし。

○「を」と書くべき語

- ▲を(雄) (男) (夫) を(ひ)と(夫) を(の)こ(男) を(ひ) (甥)
- を(、)し(雄) (雄) い(さ)を(功) さ(つ)を(獵)人(人) や(も)を(鰥)夫(夫)
- ▲を(麻) を(け) (桶) を(さ) (箴)



▲を(積) をどし(緘)  
 ▲を(尾) をかづき(鼯鼠) をふ(終) をろち(蛇)  
 さを(竿) みさを(操) とを(十) みを(播)  
 ▲を(峯) をか(岡) をか(陸)  
 ▲を(小) をち(伯父) 叔父) をば(伯母) 叔母) をと(少男)  
 をとめ(少女) をみな(女) をみなへし(女郎花)  
 をの(斧) をぎ(荻)  
 ▲を(こ) 痴) をこぜ(臘) をかし(可笑)  
 ▲を(さ) 長) をさなし(幼) をさむ(治) 修) をさむ(收) 藏)  
 をさく(大抵)  
 ▲を(し) 惜) をしどり(鴛鴦) をしへ(救)  
 ▲を(ち) 遠) をとつひ(昨日) をと(昨年)

▲を(と) 取) わざを(排優)  
 ▲を(り) 屈) をり(檻) をり(時) かわり(番)  
 ▲を(る) 折) をがむ(拜) をしき(折敷) しなり(桑)  
 しなる(萎) たをやかに。 たをやめ(手弱女)  
 ▲あを(青) あをむく(仰)  
 ▲うを(魚) かつを(鱧)  
 ▲を(豆) 爾乎波のを) ▲を(唯)  
 ▲を(し) かけ(韋) ▲を(ど) る(睡)  
 ▲を(の) く(標) ▲を(め) く(叫)  
 ▲まを(す) 申) ▲や(を) ら(徐)

以上「を」と書くべき語と、その熟語との外は、すべて、一語の上にては、「お」の假名を用ゐるべく、中と下にては、「ほ」の假名を



「よ」

用ゐるべし。但し、別に「ふ」の「お」と紛るべき語あり、次に示さむ。

あふぐ(仰)      あふぐ(扇)      あふひ(葵)      たふす(倒)

演習例題

次の諸文の假名遣の誤れる語は正し、傍線を施したるには假名を附け

- よ、
- 一、 おんなは女の音便を、とは夫の音便なり。
- 二、 をいは應ふる聲おうは驚き叫ぶ聲にて、共に應ふる聲唯の轉じたるなり。
- 三、 をん教に従ひて、身を修め家を整えむことをつとむべし。
- 四、 なを申しあげたき事候えども、またのおりにと書きおさめ候。
- 五、 緋絨の鎧着たる侍一騎三つ巴の旗立て、ひかえ居たり。
- 六、 尾上君も寐る間さえおしみて勉め居れば、前にもおさくをと

らぬ成績お得むこと疑なかるべし。

七、 獵夫は奥山に分けありて、池に泳ぎ居たる鴛鴦のつがいを見つ

八、 魚を商う翁、鯉と、榮螺と、鯉と、鰻と、烏賊とを桶に入れて、買ひ給え

九、 わが祖母上の名おばを末と申して、久しふ大阪なる甥の家にす

十、 位山登るも苦し、老の身は麓の里ぞ住みよかりける。

第五、「は」「わ」

- 例一、 うばと(噂)      いわし(鱈)
- 例二、 には庭(庭)      しわ鱈(鱈)

右の例の如く、一語の中と下とにありては「は」と「わ」と相紛る、



「わ」

而して、一音の語、又、一語の上によりては、相紛るゝことなし。

○一語の中以下に、「わ」と書くべき語。

▲あわ(泡)      みなわ(水泡)      ゆわ(う) (硫黄)

あわつ(周章)      あわた(し) (惶急)      みわ(酒瓮)

くつわ(轡)      くるわ(塵)      しわ(皺)

たわむ(撓)      たわやめ(手弱女)

▲かわく(乾)      さわぐ(騒)      さわやかに(爽)

▲しわざ(爲業)      ことわざ(諺)

▲はらわた(腸)

▲たわら(俵)

▲くわぬ(慈姑)      ことわり(理) (斷)

▲よわし(弱)      いわし(罽)

▲うわる(植)      すわる(坐)      (植う、据う、より轉じたる語)

以上「わ」と書くべき語と、その熟語との外は、一語の中、又、下に  
ては、大抵「は」とかくべし。

演習例題

次の諸文の、假名遣の誤れる語は正し、傍線を施したるには假名を附け

よ

一、 弟<sup>よ</sup>わ<sup>よ</sup>聲音さはやかにいひはけをなせり。

二、 日々、わが家のあたりにまわり来る八百屋は鹽罽の俵を忘れて  
かえれり。

三、 六に八を加えて、四つに割りたる答はいかに。

四、 従弟に問合せたるに、かれも得參らぬよしお詳しく斷り來れり。

五、 かのたはやめは貌うるわしく、みさは正しき人なり。

六、 怠らず勵め使わぬ桶は漏り、と云う諺あり。



七。 強きを怖れて弱きを侮るは、男たるもの、爲業にあらず。

八。 母にてをわする人は、一昨年七十の坂をこへたまひて、額の皺は年ごとにふえぬれど、なをきわめてすこやかにて、まだ杖を用ひたまわす。

九。 二羽の雞庭にて餌をあさりゐたるが、俄に吠へ立つる犬の聲におどろきて、あはてさはぎて、傍に植はりたる牽牛花の苗を踏倒せり。

十。 五日の風も十日のあめも、時に順うわが君が代や西の國より、こまくだらより、より來る人も御代祝ふなり。

甚重期

第六、「じ」、「ぢ」。

例一。 くじく(挫)      くぢら(鯨)

例二。 つじ(辻)      すぢ(筵)

右の例の如く、「じ」と「ぢ」とは、一語の中と下とにありては相紛

る、而して、純粹なる國語には、一語の上にて「じ」と書く語なく、一音の語にて「ぢ」と書くものなし。

○「じ」と書くべき語。

▲じ(丕)

▲あるじ(主人)      とじ(主婦)      むらじ(連)

▲いちじろし(著)      なじろ(語)      ひじり(璽)

▲うなじ(頂)      こじり(鐘)      まなじり(疵)      やじり(鐵)

▲さじき(假床)      はじく(彈)

▲しゝむ(縮)      しゝみ(蜆)      しゝら(縮羅)

▲たじろく(辟易)      まじろく(瞬)      みじろく(身動)

▲つむじ(旋風)      つじ(辻)

▲いみじ(甚)      おなじ(同)      すさまじ(荒涼)

「じ」



- ▲うじ(蛆)
- ▲かじか(鯀)
- ▲かたじけなし(辱)
- ▲くじ(圖)
- ▲くじろ(扶)
- ▲つゝじ(踟躕)
- ▲なまじひ(愁)
- ▲にじむ。
- ▲はじ(櫃)
- ▲はじむ(始)
- ▲ひつじ(羊)、(未)
- ▲まじふ(交)
- ▲おのがじ(各自)
- ▲かじく(凍)
- ▲きじ(雉)
- ▲くじく(挫)
- ▲さじ(匙)
- ▲なじみ(馴染)
- ▲にじ(虹)
- ▲にじろ(隣)
- ▲はじかみ(椒)
- ▲ひじき(鹿尾菜)
- ▲まじなひ(呪)
- ▲みじかし(短)

▲むじな(糞)

▲をこじ(膿)

以上「じ」と書くべき語と、その熟語との外は、大抵「ぢ」と書くべし。なほ、連濁にて相紛るゝものは、その清音を考へて「じ」と「ぢ」を書きわくべし。例へば、

はなぢ(鼻血)      かじか(河鹿)      はしぢか(端近)  
 などの如し。

演習例題

次の諸文の、假名遣のあやまれる語は正し、傍線を施したるには假名を附けよ。

- 一、 はぢめあるものわあれども、克く終あるものは少しと、聖は宣えり。
- 二、 わが指輪を買いたる店は北の辻を西え入りたる東側東側にあり。
- 三、 さぢきに坐りて、まじろきもせずながめらるゝは、伯父君なり。



- 四 かれはいみじき功を立て、名を顯さむとし、いさみ進みて戦えり。
- 五 蜺はどぶがいの屬にして、大なるものは八九分あり、肉の味美なり。
- 六 主人を岡氏といひ、躑躅を好みて、多く植へて樂み、また藤の花をも愛せり。
- 七 汝は幸に君子の教を辱ふせり、耻を知りて利に趨ることなかれ、われ棹さ、むに、君舵を操れ、この滯筋に沿ふてかの離島に行かむ。
- 八 わが帝國は清國と兵を交えていくばくもならざるに、陸軍は敵の勢を平壤に挫き、追ふて遼東の野を蹈みにしれり。
- 九 みはたせば山べには尾上にも麓にも、うすき濃きもみじばの秋の錦をぞ、立田姫をりかけて露しもにさらしける。
- 十

第七 「ず」づ。

右の諸例の如く、一語の上中下、いつくにしても「ず」と「づ」と相紛る、而して、純粹の國語には、一音の語にて「づ」と書くべきものなし。

「ず」

○「ず」と書くべき語。

- ▲ず(不) かならず(必) み、ず(蚯蚓)
- ▲こず(忍) はず(筈)
- ▲す、し(涼) す、(鈴) す、(錫) す、き(鱧)
- す、し(る) 蓮(荷) す、な(菴) す、め(雀)
- ▲た、ず(む) ねずみ(鼠)



▲いしずゑ(礎)

▲かず(數)

▲きず(傷)

▲くず(葛)

▲す(視)

▲す(漫)

▲なずらふ(準)

▲はずみ(機)

▲もず(鵞)

▲まず(雜)

以上「ず」と書くべき語と、その熟語との外は、大抵「づ」の假名を用ゐるべく、なほ、連濁にて紛るゝ語は、その清音を考へて、「ず」と「づ」を用ゐわくべきこと、次の例の如し。

おほず(天洲)

いしづ(石津)

まゆずみ(眉墨)

さかづき(酒杯)

演習例題

次の諸文の假名遣の誤れる語は正し、傍線を施したるには假名を附けよ。

一、 鵞トビを囿にして、めぢろを捕ふるおのこあり。

二、 かれは貧しき者をあわれまぬが故に、吝こしとの噂高し。

三、 隣のとぢはあはて、岩につますき、かいなに疵きずを負ひたるぞおかしき。

四、 鶺鴒トビは雀よりも小き鳥にて、粟稗アワビを食とす。

五、 出雲の松江は鱸ササギの産地として、世に著れたり。

六、 友はかならず自ら來る筈なれば、よろずは相語らいて定めむ。

七、 鯨は水に遊ぶ獸にて、古はこれを魚のたぐひなりといひき。

八、 北畠顯家は和泉の堺浦にて討死せり。

九、 狼出する深山の奥に草刈る童より、藻鹽アワビ焼く賤しんが苦屋の蚤おとめまでも、大君の御稜威しんを仰がぬわなし。

十、 豊葦原トヨアシハラの瑞穂國ミズホノクニは千代萬代ちよばんだいもうごきなきくに、わが君が代は千代萬代も動きなき御代みよ、祝へもろびと。



第八. 阿段の轉呼音.

例 こたふ(登)

かなふ(適)

いとふ(厭)

きのふ(昨日)

右の例の如く「たふ」「なふ」などは、その阿段の音、於段の音に轉呼せられて「とふ」「ふ」などと、相紛るゝことあり。

その語尾を波行の他の音に轉ずる語にて相紛るゝものは、その語尾を轉じ試れば、容易く正しき假名遣を辨へ得べし。

例へば、

あふ(遇)あひ、

かふ(買)かひ、

おふ(負)おひ、

こふ(を)こひ、

おこなふ(行)おこなひ、 とゝのふ(整)とゝのひ、

はらふ(拂)はらひ、 ひろふ(拾)ひろひ、

などの如し、かゝる語を除きては、次の三語の外、すべて、阿段の假名を用ゐるべし。

○於段の假名を用ゐるべき語。

▲きのふ(昨日)

▲かげろふ(陽炎)

▲かげろふ(蟬聲)

於段の假名

第九. 衣段の轉呼音.

衣段の音の、その下に、「う」または「ふ」を承くる時には、亦、於段の直音或は拗音に轉呼せらるゝこと、前に説きたるが如し。今、純粹の國語にて、その假名遣の、かく紛れ易きものを擧げ



衣段の假名

む。

○衣段の假名を用ゐるべき語。

▲けふ(今日)

▲うれふ(憂)

▲あふ(醉)

演習例題

次の諸文の假名遣を誤れる語をば正し、傍線を施せるには假名を附けよ。

- 一、かゝるゑがたき好きおりにおうは天の與ふる幸といふべし。
- 二、天子といえどもなを尊き人あり、その父母あることの謂なり。
- 三、ちようすは手水の音便にて、おうみは淡海の約音を轉呼せるなり。
- 四、常磐をときわと讀むはとこいわの約音にて、織田をおだと稱ふるはをりたの略音なり。

- 五、酒によふてたわむる、習あるは國の耻なり。
- 六、明に治るといふ御代の數も今は三十五となりて、天地ときわまりなき御位はいよく隆へゆくなり。
- 七、昨日今日とをくりむかゝて、われは十あまり六日をこの田舎に空しく費しぬ。
- 八、主人の翁は老ひたれど、國をおもふ心は少しも人に譲らず。
- 九、くわしき繪解は煩しきを厭ふて記さゞれど、尋ぬる人あらば答ふべし。
- 十、かの肥へたる相撲取はついに終わりの日までかちとふせり。
- 十一、十餘萬の蒙古勢は底の藻屑と消へて、残るはたゞ三人。
- 十二、花になく鶯水にすむ蛙の聲をきけば、生きとしいけるもの、いすれか歌をよまざりける。
- 十三、露にたはむや菊の花霜に傲るや菊の花、あゝあわれく、あゝ白菊人のみさをもかくてこそ。
- 十四、千里のみちも足もとよりぞはぢまれる、葉末の露もつもれば淵



- となるぞかし雲居る山も塵ひじよりぞなれりける、書よむ道も  
 ことほりのみは一つなり。
- 十五、 母の思は空にみちゆくゑも知らずはてもなし、月の桂をたおり  
 てぞ家の風をば吹かせつる、あをげく母のみ功。
- 十六、 いにしえの奈良の都の八重櫻、さよ九重ににおいぬるかな。
- 十七、 あおげばとうとし、わが師の恩教の庭にもはや幾年をもえはぬ  
 と疾し、この年月今こそわかれめ、いざさらば。

第四章 字音假名遣

吳音  
漢音  
字音

連濁

「ひ」つぎ「あり」「なし」などの國語に漢字を當て、「日」「月」「有」  
 「無」など、書き、これを「ニナ」「グァツ」「ウ」「ム」など、讀むを、その  
 字の吳音といひ、「シツ」「ゲツ」「イウ」「ブ」など、讀むを、その字  
 の漢音といひ、これらをすべて字音といふ。

例一。

くわう(皇)こう(后)くわう(高)ごう(高) かう(高)さ  
 ん(山)かうざん(高) しん(進)ほ(歩)しん(高)ぼ(高)

右は字音の連濁なり。

例二。

りふ(立)けん(憲)りつ(立)けん(憲) がふ(合)へい(合)へい  
 併(併)が(併)べい(併) はつ(發)たつ(達)は(併)たつ(達)  
 てき(敵)かん(艦)て(併)かん(艦) がく(學)かう(學)かう(學)  
 校(校)が(併)かう(校) ほく(北)ほう(方)ほ(併)ほう(方)



音便

右は字音の音便なり。

し(詩)か(歌) しいか。 し(四)じ(時) しいじ。  
ふ(夫)ふ(婦) ふうふ。 に(女)ば(房) によ  
うばう。

例三。

さむ(三)ね(位) さんみ。 えぬ(延)いん(引) 引  
えんにん。 さぬ(算)よう(用) さんによ。  
しぬ(親)わ(玉) しんなう。 せつ(雪)いん  
(隠) せっちん。

例四。

かう(孝)かう(孝) コウコウ。 けい(教)だ(待)う  
(導) キョウドウ。

轉呼音

右は字音の轉呼音なり。この例四なる假名と、

じ(じ)ゃう(事情) ち(ち)ゃう(治定) か(か)い(い)ん(改印)。

字音假名遣

くわ(わ)い(い)る(る)ん(會員) の如き假名と、などを書きわくるを、字音假名遣とす。

例五。

し(尚) 尚(常) 掌(賞) 償(償) せ(召) 沼(沼) 招(招) 昭(昭)  
詔(詔) て(朝) 潮(潮) 嘲(嘲) て(蝶) 蝶(蝶) 牒(牒) 諜(諜)。

この例の如く、組立の相似たる字は、同じ假名遣なるが多し。かゝる字どもにては、その一字の假名遣を推して、餘の字の假名遣を知り得べし。

以下、最普通なる字音の假名遣を示す。但し、右の例五にいへるが如き類字は、その一字のみを擧ぐ。

第一。 「い」 「る」。

ゐ 爲(位) 委(違) 彙(畏) 胃(威) 尉(尉) ▲ ゐ(域) ▲ ゐ(院) 員(員)。

右の外は、大抵「い」の假名を用ゐるべく、又、すべて、字段の音の下には、「ゐ」を用ゐること、次の例の如し。

「い」 「る」。



「え」「ゑ」

さい 才、 する 水、 らい 頼、 るゝ 類、

第二、「え」「ゑ」  
ゑ 惠、慧、會、畫、衛 ▲ゑい 衛 ▲ゑつ 越 ▲ゑん 遠、怨、冤、  
援、垣、圓。

右の外は、大抵「え」の假名を用ゐる。

「お」「を」

第三、「お」「を」  
を 汗、惡 ▲をん 穩、溫。

右の外は、大抵「お」の假名を用ゐる。

「か」「く」

第四、「か」「く」

く 戈、科、花、果、過、臥、和、火、瓜、寡、瓦、華 ▲くわい 灰、怪、塊、快、回、懷、  
誨(海は「かい」なり)、潰、會、外 ▲くわん 元、願、官、關、寬、卷、款、貫、丸、緩、  
觀、還、換、患 ▲くわつ 月、活、滑 ▲くわく 郭、獲、畫、擴。

右の外は、大抵「か」の假名を用ゐる。

「じ」「ぢ」

第五、「じ」「ぢ」

ぢ 持、寺、侍、侍、時などは「じ」なり、治、尼 ▲ぢき 直 ▲ぢく  
軸 ▲ぢつ 昵 ▲ぢん 塵、陣 ▲ぢう 重、住 ▲ぢやう 場、丈、  
定、娘 ▲ぢよ 女、汝、如、恕などは「じよ」なり、除(徐は「じよ」なり) ▲  
ぢよく 匿。

右の外は、大抵「じ」の假名を用ゐる。

「ず」「づ」

第六、「ず」「づ」

づ 豆、圖、途、 この外は、大抵「ず」の假名を用ゐる。  
第七、「あう」「あふ」「おう」「わう」。

あふ 押、凹 ▲おう 翁、應、歐 ▲わう 王、往、黃。  
右の外は、大抵「あう」と書くべし。

「かう」「かふ」「こう」「か  
こふ」「くわう」

第八、「かう」「かふ」「こう」「こふ」「くわう」。

かふ 合、闔、甲 ▲こう 后、後、侯、口、構、講は「かう」なり、寇、厚、公、



孔、工、江などは「かう」なり、洪、恒、肯、弘、薨、興 ▲こふ 劫 ▲くわう  
光、廣、皇、荒、轟、宏。

右の外は、大抵「かう」と書くべし。

第九 「さう」「さふ」「そう」。

さふ 雑、挿 ▲そう 奏、搜、嗽、走、増、宗、總、叢、送。

右の外は、大抵「さう」と書くべし。

第十 「たう」「たふ」「とう」。

たふ 塔、答、沓、納 ▲とう 登、藤、等、東、動、同、冬、統、童、撞は「たう」  
なり、豆、鬪、偷、斗、投、透。

右の外は、大抵「たう」と書くべし。

第十一 「なう」「なふ」「のう」。

なう 腦、囊 ▲なふ 納 ▲のう 農、能。

第十二 「はう」「はふ」「ほう」。

はふ 法、乏 ▲ほう 奉、蜂、封、豐、鳳、朋、剖、矛、茅は「ばう」なり、謀、  
買。

右の外は、大抵「はう」と書くべし。

第十三 「まう」「もう」。

まう 盲、孟 ▲もう 毛、蒙。

第十四 「ゆう」「いう」「いふ」。

いふ 邑、揖。

この外には「ゆう」と書く字も、亦「いう」と書きてよし。

第十五 「やう」「よう」「えう」「えふ」。

よう 用、傭、容、孕、蠅、擁、膺 ▲えう 妖、要、遙、曜、幼 ▲えふ 葉。

右の外は、大抵「やう」と書くべし。

第十六 「らう」「らふ」「ろふ」。

らう 老、牢、勞、浪 ▲らふ 蠟、拉 ▲ろう 樓、漏、陋、弄、籠。

「らう」「らふ」

「やう」「よう」「えう」「えふ」

「ゆう」「いう」「いふ」

「まう」「もう」



「きょう、きょう、けう、けふ」

第十七 「きょう」「きょう」「けう」「けふ」  
右の外は、大抵「きょう」と書くべし。 狭、協、業、怯

「しょう、しょう、せう、せふ」

第十八 「しょう」「しょう」「せう」「せふ」  
しょう 松、衝、鐘、從、棟、誦、升、蒸、承、稱、勝、證、乘、繩、冗 ▲せう 召、小、肖、少、焦、嘯、燒、笑、椒 ▲せふ 妾、捷、涉、攝

右の外は、大抵「しょう」と書くべし。

「ちやう、ちやう、てう、てふ」

第十九 「ちやう」「ちやう」「てう」「てふ」  
ちやう 重、冢、寵、徵、澄 ▲てう 朝、兆、調、超、釣、鳥、肇、弔、條 ▲てふ 蝶、帖、疊

右の外は、大抵「ちやう」と書くべし。

「によう、ねう」

第二十 「によう」「ねう」  
ねう 尿

「ひやう、ひやう、へう」

この外には、通常この類の字音なし、「女」を「によう」と呼ぶことあるは、「によ」の延びたるなり。

第二十一 「ひやう」「ひやう」「へう」  
ひやう 憑、氷、謬 ▲へう 表、豹、標、猫、廟、秒

この外は、大抵「ひやう」とかくべし。

「みやう、めう」

第二十二 「みやう」「めう」  
めう 苗、妙 この外は、大抵「みやう」と書くべし。

「りやう、れう、れふ」

第二十三 「りやう」「りやう」「れう」「れふ」  
りやう 陵、龍 ▲れう 聊、療、寥、了、料 ▲れふ 獵

右の外は、大抵「りやう」と書くべし。

「きう、きふ」

第二十四 「きう」「きふ」  
きふ 急、及、泣、給 この外は、大抵「きう」と書くべし。

「しう、しふ」

第二十五 「しう」「しふ」



しふ 十、拾、集、執、習、輯、澁、濕、襲。  
右の外は、大抵「しう」と書くべし。

「ちう」、「ちふ」

第二十六 「ちう」「ちふ」

ちふ 蟄 この外は、大抵「ちう」と書くべし。

「にう」、「にふ」

第二十七 「にう」「にふ」

にふ 入 この外は、大抵「にう」と書くべし。

「りう」、「りふ」

第二十八 「りう」「りふ」

りふ 立 この外は「りう」と書くべし。

新定の字音  
假名遣

第二十九 新定の字音假名遣

文部省の、小學校令施行規則にて、新に定めたる字音假名遣は左の如し。

▲従來の字音假名遣

い、ゐ、

▲新定の字音假名遣

い、

え、ゑ、  
お、を、  
か、くわ、  
が、ぐわ、  
じ、ぢ、  
ず、づ、

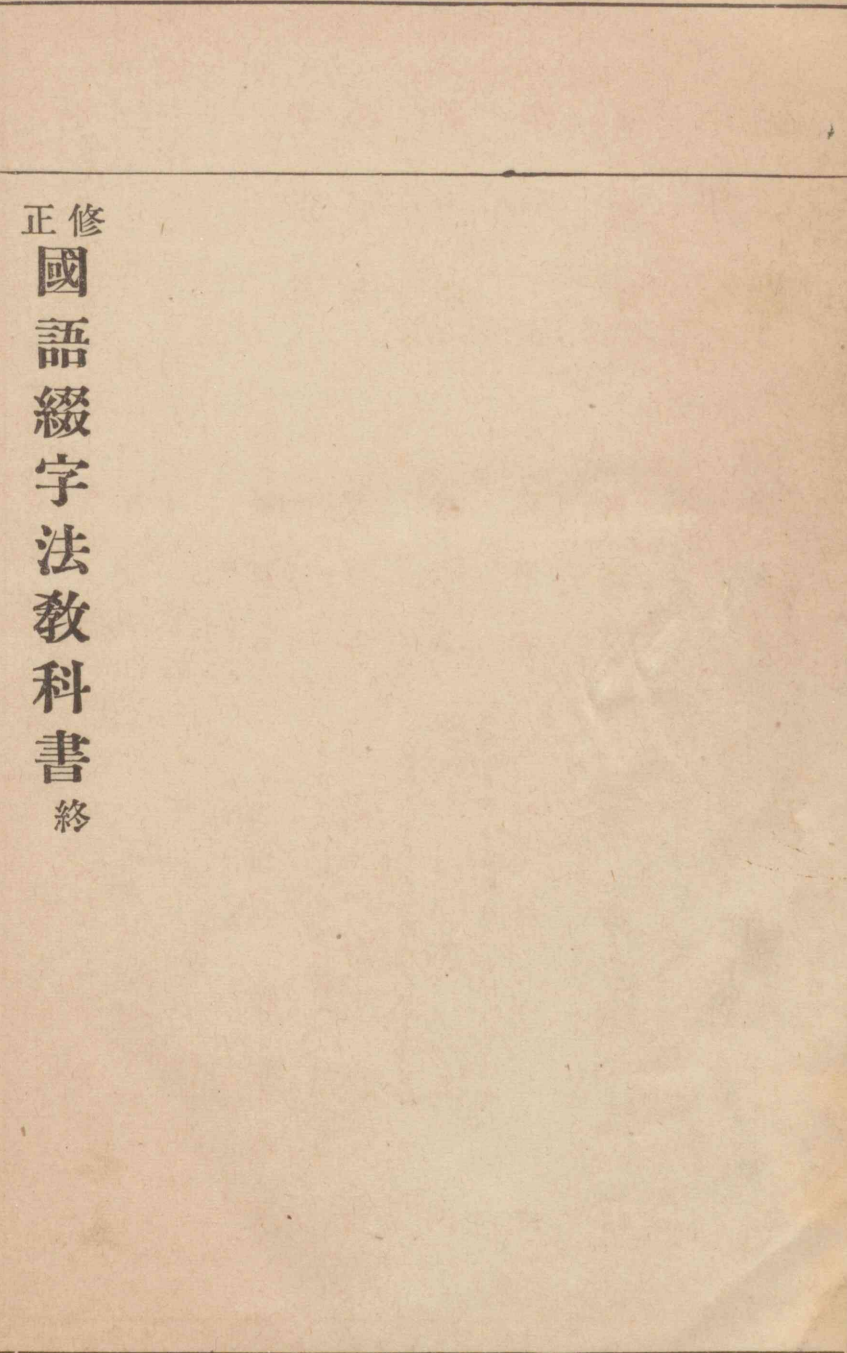
あう、あふ、おう、わう、  
かう、かふ、こう、こふ、くわう、こー、  
がう、がふ、ごう、ごふ、ぐわう、ごー、  
さう、さふ、そう、  
ざう、ざふ、ぞう、  
たう、たふ、とう、  
だう、だふ、どう、

え、  
お、  
か 従來慣用の例に  
が 依るも妨なし。  
じ 同  
ず 同  
おー、  
こー、  
ごー、  
そー、  
ぞー、  
とー、  
とー、









修正國語綴字法教科書終

明治三十四年十月十一日印  
明治三十五年七月七日修正再版印刷  
明治三十五年八月廿四日修正三版印刷  
明治三十七年一月一日第四版印刷  
明治三十七年一月五日第四版發行

修正國語綴字法教科書與附  
定價金貳拾五錢

若山

文部省 檢定 著作權 所有

國語科 中學校

編纂者 開成館編輯所  
 發行者 東京市小石川區小日向水道町七十三番地 西野虎吉  
 發賣者 大阪府東區北久寶寺町四丁目百六番屋敷 三木佐助  
 印刷者 東京市京橋區築地三丁目十一番地 野村宗十郎  
 發行所 東京市小石川區小日向水道町七十三番地 東京開成館  
 發行所 大阪府東區心齋橋通北久寶寺町角 大阪開成館  
 (振替貯金口座) 第五參貳貳番  
 (振替貯金口座) 第貳壹六〇番

(刷印所造製版活地築東東社會式株)







